



ヨーロッパピアノ教育連盟 ベルギー支部長
ディアンヌ・アンデルセン先生

インタビュー 秦はるひ

今回は、ヨーロッパピアノ教育連盟ベルギー支部長であり、ベルギーを代表するピアニストであるディアンヌ・アンデルセン先生にお話を伺いました。以下、先生のお話です。

ベルギー支部の活動には、2つの柱があります。

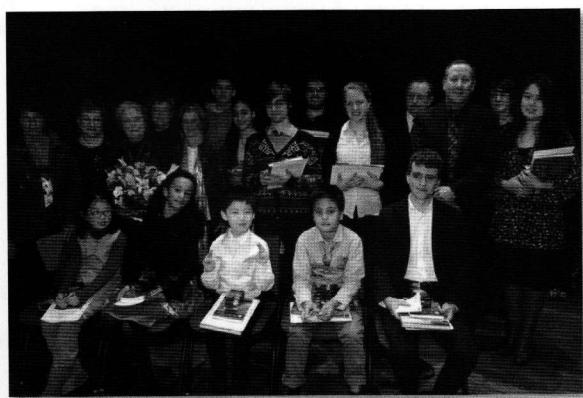
1、毎年行われる、Journée pédagogique。これは、研究や教育に関する様々な講演です。

「暗譜について」「あがることについて」「リラックスに関するからだの機能」などもありましたし、2013年は、バガテルとエチュードがテーマ、特にエチュードについては、「今でも尚、有意義であるのか？それはなぜか？」とディスカッションしました。

昨年11月の講演は、「モンポウのピアノ曲への教育的接近」「数人で愉しくではなく、なぜピアノはたつたひとりで弾くのか？」「Oli Molsen ペダルの芸術、響きの先見性」。私は、9巻の演奏メトードを書いたBlanche Selvaについての研究発表をしました。支部には、会員というものは存在しませんが、毎年のイベントには、多数の参加者があります。

2、2000年より、若いピアニストのためのコンクールを行っています。10歳、14歳、18歳、24歳までと、4つのカテゴリーがあり、課題は、バッハと自由曲、第4カテゴリー（最年長）には、エチュードと20、21世紀のベルギーの作品が出ています。持ち時間は、各々7分、12分、20分、22分（ファイナルは+3分）です。ファイナルは、第3カテゴリーまで、クラシック、自由曲の他に、1950年以降の作品が課されます。優勝者は、次年度にリサイタルができます。今年度は、計54人が参加、19の国籍に分かれていきました。

次に、ピアニストとしての先生のキャリアを話していただきました。



今年のEPTAベルギー支部コンクールにて

デンマーク人を父に、フランス人を母にデンマークで生まれ、18歳で王立ブリュッセル音楽院を卒業。師事したシュテファン・アシュケナージは、高貴で繊細さを備えた大きな音楽家でした。ペダルの使い方、響きの探し方、正しいフレージングの重要性などを学びました。彼のモーツアルトの録音は、ドイツグラモフォンで再版されています。友人のアニー・フィッシャー

は、私にロマンティックな音楽においての情感の表出法を教え、私の心を開いてくれました。

その後、数多くの指揮者と共に演。サヴァリッシュ氏とはモーツアルト、ブーレーズ氏とはベルク、プレトル氏とはバルトークのスケルツォ（ヨーロッパ初演）などです。バルトークの友人で、彼のデュオパートナーである、アンドレ・ゲルトナーと長年にわたり共演。バルトーク資料館創立者のDille氏は、私の演奏を「バルトークの真の精神を伝える」と評しました。バルトーク氏とは会ったことはありませんが、内向的で複雑な人物、厳密な精神と深い感受性の持ち主で、彼の作品の中だけにそれらが息づいていて、彼の音楽にはいつも「苦み」^{にが}があると感じています。

ベルギーという国は、外国人で成り立っている国なので、人々は、精神的に常に開放されていて閉鎖的でないことが、この国の豊かさにつながっていると思います。私は常に知らないものに好奇心を持っています。数えきれないほど多くの初演をしました。多数の録音の中、ベルギーの作曲家René Defossez、Joseph Jongenの作品、作曲家Alexandre Tansman自身とのデュオ、Ernst Tochの2番コンチェルトとピアノ5重奏曲の世界初録音、私に捧げられたGoolkasian-Rahbeeの全作品、最新（2015）では、パリ国立高等音楽院院長も務めたDelvincourtのヴァイオリンソナタ集などが挙げられます。

王立ブリュッセル音楽院で、1975年より99年まで教鞭をとり、以降は、ニューアイングランド（アメリカ）、グネーシン（モスクワ）、上海（中国）などの音楽院に定期的に招かれるほか、世界各地のマスター・コースで教え、「教えることはpassion」と思っています。日本では、EMC Japanが、ラヴェルとミヨーの作品についてのDVDを出版しています。各国の国際コンクールの審査にもあたり、この5月のエリザベト国際コンクールでも審査員を務めました。何人かの才能を世に出した前回と比べても、非常に高いレヴェルだと思いました。

昨今、良い演奏を目指す若者たちは、自分に注目を集めようと試みています。しかし、自身を主張することは全く必要なく、かえっておかしな演奏、作曲家の意図からは遠いものとなります。最も興味深いことは、紙に書かれた音符の後に存在する人格を理解しようとすることです。つまり、フレーズの線、楽譜に書いてあるマークの意味などを理解しようとすることにより、“その人”に近づくことができ、この知りたいという欲求により、もうひとりの“人”への尊敬の念と愛が生まれ、更に、演奏者の個性も開花させ、意義あることになるのです。

（国際部 はた はるひ）



>Anne Fisscherと



カーネギーホールにて